

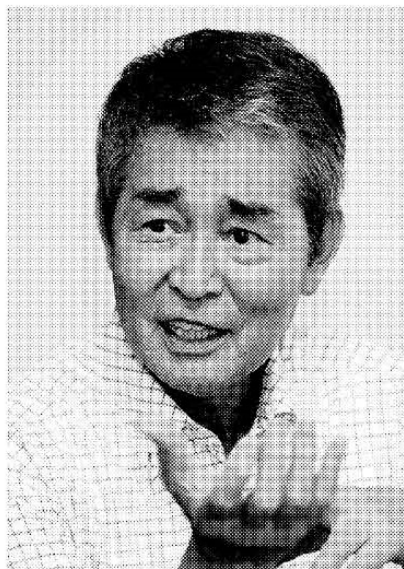


長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東大第一内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

酷暑のお盆に飛び込んできた訃報に、しばし呆然(ぼうぜん)としました。石原軍団を率いた人気俳優・渡哲也さんが10日、都内の病院で亡くなり、すでに家族葬を済ませたとのこと。享年78。死因は肺炎との発表です。華やかな役者人生の裏側で、長きにわたる数々の病気の闘いの人生でした。

無論、お目にかかったことさえない大スターですが、私は、渡さんに「ありがとう」を言いたいことが3つあります。一つ目は、医療者としての「ありがとう」。それは、1991年、渡さんが直腸がんの手術を受けて、オストメイト(人

俳優 渡哲也



工肛門使用者)だと公表したことです。大腸がんは日本の国民病といってもいいほど多いがんのひとつであり、オストメイトは国内に20万人以上いるはずですが、恥ずかしい、隠したいと考える人が多くいます。しかし、大スターの渡さんが公表されたことで、患者さんたちの空気が少し変わったと感じていま

す。当時、石原プロモーションの小林専務(故人)が、涙ながらに「美意識の強い彼にとつて、つらい決断だった」と語ったことを覚えています。勇気ある公表でした。

二つ目は、兵庫県民としての「ありがとう」。兵庫・淡路島出身の渡さんは、1995年の阪神淡路大震災の時、石原軍団の皆さんとともに、いの一歩に炊き出しに駆け付けてくれました。当時、私は市立芦屋病院の勤務医でした。たくさんの市民

る人と、心から応援に来てくださっている人を被災者は敏感に嗅ぎ分けます。

石原軍団は、2011年の東日本大震災のときにも宮城県石巻市を訪れ、2万8000食分のおでんやカレーを振る舞ったといえます。「勇気を与えていただきます。少しでも元気になってほしい。少しでも明日へ進む力になればいい」と語った渡さんの謙虚さに、頭が下がりました。

そして三つ目は、男としての「ありがとう」です。昭和・平成の大スターでありながら、あなたには、絶対に石原裕次郎さんの前に立とうとはしませんでした。闘病中の石原さんを想い、「万が一のことがあったら、私も殉じたい」と涙ながらインタビューに答えた渡さんは最期まで、日本の芸能界史上最もカッコいい「ナンバー2の男」を貫いたはずで、一歩引いた男の美学、憧れ続けます。

芸能界史上最もカッコいい「ナンバー2の男」